

北九州市長 武内和久様

声明文

2024年1月25日の北九州市長定例記者会見において発表された「門司港地域複合公共施設整備事業の今後の進め方について」に対し、遺憾の意を表明するとともに、鉄道遺構の現地保存を原則とした計画案の再検討を強く求めます。

鉄道史学会会長 渡邊恵一
都市史学会会長 中野隆生
(順不同)

記

北九州市は今般、門司港地域複合公共施設の建設予定地において出土した鉄道遺構のうち、「土木の歴史、これを顕著に表す部分を切り出して移築保存」する方針を発表しました。しかしながら、土木建築施設の遺構を「切り出して」移転することは一義的には文化遺産を破壊する行為です。

会見後の質疑応答および新聞報道によれば、市が意見聴取をした文化財保護審議委員は5名全員が現地保存を求めており、別に意見を得た近代の鉄道遺構に関する専門家も、「当時の土木技術の粋ともいえる工夫が現地に良好な状態で残っていることについては、大きな意味がある」と評価している点は見逃せません。

両学会は、当初から遺構の保存と公共複合施設整備の両立を図ることを提案し、可能な限りの協力と支援を申し出ました。そのような意見をまったく顧慮せずに工事を強行すれば、北九州市の歴史を理解するための貴重な遺構は永久に失われます。この遺構は九州最初の鉄道の機関車庫としての重要性のみならず、港湾と鉄道駅を直結するというアイデアでスタートを切った門司の近代都市の原点を示す、都市史的にもかけがえのない遺構です。これを市の都合で指定された別の場所に移して説明板を立てても、人々がもとの情景を想像し、その姿に思いをめぐらすことは困難であると思われる。

また、このような決定は、「門司港レトロ」を標榜する北九州市の姿勢が、真に歴史を尊重するものではないという印象を、国内はもとより海外から門司港を訪れる観光客にも与えることにつながります。そして、そのような決定を行った現市長の判断が、後世の批判にさらされ続けることを危惧します。

北九州市は、ただちに1月25日の発表内容を取り下げ、各方面にわたる専門家の意見についてもきちんと耳を傾けて、市民生活の利便性向上と文化遺産の保全を通じた市の価値向上を両立させるような計画案の策定を強く求めます。

以上

2024年1月31日